

あいちトリエンナーレ2013

堀内 研自

「われわれはどこに立っているのか」

昨年は、二回目の国際芸術祭となる「あいちトリエンナーレ」（以降、あいちトリ）が開催された。入場者は前回三年前の五十七万人を上回る六十二万人以上となり、右肩上がりの結果に、次回開催も多いに期待できる。今回のテーマは「揺れる大地―われわれはどこに立っているのか/場所、記憶、そして復活」という、芸術祭としては非常に重いものが与えられた。作品には東日本大震災や原発事故を題材にしたものもあり、震災報道だけでは気が付かなかったことを、アートを通じてさまざまな角度で考えさせられた。また、あの震災以来、大地震や津波、原発事故という、現代の日本で生きて行く上では、決して逃れることのできない恐怖を「われわれはどこに立っているのか」というキーワードで多くの観賞者、作家と共有できたことは、意義がある芸術祭であった。

変わりゆく長者町

あいちトリの特徴は、まちなかでの芸術展開にある。前回に引き続き伏見の長者



中電 本町開閉所跡地 魅力的なモダン建築



東陽倉庫 名和晃平の「FOAM」



岡崎シビコ 志賀利江子の「螺旋海岸」



松本町界隈の昭和レトロな街並み

動のため「STAR GALLERY」というギャラリーを開設している。

町では多くの展示を行っていたが、まちが大きく様変わりをしていて驚いた。前回、不思議な吹き抜けがある空きビルを愛知出身のアーティスト渡辺英司らが一棟まるごとアート作品としてしまった「スターネットビル」がどうなったか楽しみだったが、すでに建て替えられていた。変わって、「中部電力 本町開閉所跡地」の会場は、魅力的なモダン建築で、インパクトのある空間であった。こうした、眠っていた珍しい建築がアートと一体となり公開されることも、あいちトリの楽しみの一つである。前回中心的な展示会場だった長者町繊維卸会館は駐車場に旧モリリン名古屋支店ビルは、最新のオフィスビルへと姿を消していく建物もあるが、古い建物をリノベーションして作家やクリエイターの拠点となる場所もできつつある。「長者町 TRANSIT BUILDING」はアーティストや建築家、クリエイターなど、さまざまな業種が集まるクリエイティブなビルとして二〇一二年にオープンした。また、先の渡辺英司は伏見の地下街で若手発掘や自身の活

その他の会場も充実

納屋橋の東陽倉庫テナントビルは今回も健在で、旧ボーリング場だった大空間は、名和晃平の増殖し続ける巨大な作品の展示を可能にした。前回は名古屋市のみでの展開であったが、今回は岡崎会場も新たに加わった。岡崎は会場が分散し過ぎという不満もあったようだが、総じて好評だった。地元になじみの百貨店「岡崎シビコ」では、岡崎出身の志賀利江子が大規模な展示を行い、屋上では地元の建築事務所 studio velocity が屋上全体を作品へと変貌させて見せた。さらに、かつての花街、松本町会場は、昭和レトロの街並みがとても魅力的であった。消えゆく物と、現代の最先端アートのコラボレーションはとても刺激的であり、今後も地方に眠るなつかしい限界をあいちトリで活用してほしい。

講座には、近隣二校の小学二・六年生七名が参加。犬山市文化史料館の城下町復元模型や講座オリジナルのガイドブックを用い、また実際に城下町を歩いて町並みや町家の特徴について学んだ。ガイド本番では、一般公開されている国登録有形文化財の旧磯部家住宅を起点に、町家、車山蔵、札の辻などを案内した。城下町を対象としたことでガイドの距離も時間も長くなったが、会話が途切れたときに城下町に関するクイズを出題するグループもあった。ガイドを終えた子ども達からは、「お客さんと話ができて楽しかった」「お客さんが質問をしてくれて嬉しかった」といった感想が多く聞かれ、こども達にとってお客さんとのやり取りが充実した時間につながったようだ。



犬山城下町でのガイド本番の様子

◆ 鳳来館と大野のまち

新城市大野(旧鳳来町)は、江戸時代は秋葉街道(秋葉山〜鳳来寺山)の宿場町として、明治時代には別所街道(豊橋〜別所(現東栄町))が開通し、主産業の林業や養蚕業の隆盛を背景に経済・物流の要衝として繁栄したまちで、現在も別所街道沿いには歴史的建造物が数多く残る。まちの中心に、国登録有形文化財「大野宿鳳来館」がある。一九二五年に建てられた大野銀行本店の建物で、二〇〇九年にカフェ・ギャラリーとして生まれ変わった。

講座には、地元の小学六年生七名が参加。地元の愛知県文化財保護指導委員の方が講師となり、まちの繁栄によって大野銀行本館ができたという背景から、犬山城下町と同様に、鳳来館及び大野のまちの歴史や産業について学びガイドした。参加したこどもからは「大野のまちのこ

とが知れてよかった」という感想も聞かれた。また、江戸時代に旅人が大野でわらじを買い求めたことから、講座でわらじ履き体験をし、ガイド本番でもこども達がわらじを履いてまちをガイドした。



鳳来館(上) ガイド本番の様子(下)

地域と連携した取り組みに

こども達にとって本事業の意義は、文化財や地域の歴史について学ぶだけでなく、学んだことを人に伝えることでこども達自身が自分に自信を持てたり、地域に愛着が感じられるようになることにあるだろう。初めは慣れないガイドで戸惑っていたこども達も、ガイドを二回三回と繰り返すうちにガイドの内容が格段と上手になり、お客さんとのやり取りの中でガイド内容を自らアレンジするなど、短時間での成長がうかがえた。本事業の継続性を考えると、愛知登文会主体の取り組みから、今後は地域の協力者を増やしながら、所有者・地域・周辺の小学校などと連携した取り組みとなるよう検討していく必要があるだろう。

